

研究発表もうしこみフォーム

氏名：ジャルガルサイハン・ラマー

氏名のローマ字表記：JARGALSAIKHAN LKHAMAA

所属：大阪大学大学院 人間科学研究科 人間科学専攻

専門分野：保全生態学、自然共生論、地域研究

発表のタイトル：モンゴル国における野生動物資源の利用と保全の相克—マーモットの事例を中心に

発表要旨（600字～800字程度）：

本発表では、モンゴル国におけるマーモット（モンゴル語：タルバガ、学名：Siberian marmot）の保全に関する取り組みについて事例を取り上げるとともに野生動物資源の利用と保全という観点から論じる。

マーモットはモンゴル人の衣食住や医薬に用いられる野生動物だが、20世紀の過程で乱獲によって激減し、最近では、国際自然保護連合（IUCN）の編纂する『絶滅危惧哺乳類動物図鑑』（レッドデータブック）に記載されるまでに、生息域及び個体数の減少が進んでいる。こうした状況の下、モンゴル国政府は2005年にマーモットが生態系に果たす役割を再評価し、マーモットを再導入する取り組みに着手したが、その実態は殆ど知られていない。

事例としては、2017年7月に実施されたにバヤンホンゴル県ジャルガラント郡からトゥブ県デルゲルハーン郡へのマーモット（50匹）の再導入事業の実態を取り上げるとともに、マーモットの再導入事業の記録映像、関係者の間で交わされた公文書などを用い、マーモットの再導入事業をめぐる各利害関係者の関わりについて具体的に報告する。

事例を通じて幾つかの問題が確認できる。具体的には、①再導入されたマーモットのモニタリングの実施の状況、②捕獲地と放出地の住民の意識、③放出地の選定などが挙げられる。

こうした問題は他の地域において実施された事例にも共通する。一例を挙げれば、再導入されたマーモットを捕獲したり、地域間でマーモットを奪い合うという問題も生じている。マーモットの再導入事業について、成果を挙げている事例もあるが、依然として動物資源とみなす意識は根強く、住民の意識の醸成が進まなければ、却って個体数の減少を招くリスクを抱えているといえる。

結論として、自然環境の保全と資源の文化的・経済的な利用が衝突するジレンマを抱えるマーモットの再導入事業の功罪を指摘する。